The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	安心について : 創造的な対話のために
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	臨床哲学. 2013, 14(2), p. 39-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24719
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

安心について――創造的な対話のために

川崎唯史

はじめに

新しいものは、いつ、どこで生まれるのだろうか。とりわけ対話において何かが新たに生じるとき、その対話はどのようなものか。これは、創造とは何かという問いではない。その問いにもいずれ取り組みたいが、本稿で私が問うてみたいのは、「創造を準備するものは何か」ということである。

この問いに至った経緯を簡単に紹介しておく。私は 2011 年度の 4 月以来、とよなか国際交流協会で、職員の方々と一緒に「さんかふぇ」という対話の場を設けてきた[1]。毎月二時間ほど集まった人たちで話す場である。また、同協会で二カ月に一度開催される「哲学カフェ」にはさんかふぇ以前から関わっており、臨床哲学研究室のメンバーに進行役を依頼したり、自分でも進行役をしたり、あるいは一人の参加者として参加したりしてきた。これに加えて、箕面市国際交流協会での「語り合いカフェ」や淀川キリスト教病院での「倫理カフェ」にも参加し、それぞれの場所で多くを学んだ。

とはいえ、私が対話に参加する主要な動機は、そうした学びを通じて成長することではない。私にとって対話の最大の魅力とは驚きである。いくつもの対話において、さまざまなことが私を驚かせた。あえてまとめるならば、それは創造を目の当たりにする驚きである。創造というと大げさだが、何も特別なことではない。対話の参加者にとって今までになかったことが起こること、それを私は創造と呼んでいる。創造が起こる場面に立ち会うことの魅力、そして自らも創造を経験することの魅力、それが私を対話に赴かせる。

話をさんかふぇに戻すと、特に 2012 年度は主に協会職員と臨床哲学のメンバーで毎月集まり、前回の振り返りと次回に向けての話し合いを行ってきた。私はこのミーティングに出て対話の場について考える中で、対話が創造的になるのは単なる偶然によってではなく、少なくともそれを準備するものがあるのではないかと考えるようになった。何かが生まれた！　と驚かされる回と、そうでもない回とがあった。もちろん、こうした感触は私

のものであって、参加者によって感想は異なるかもしれないし、何も創造されない対話は失敗だというのでもない。そうではあれ、私は「何かが生まれたと思われる回とそうでない回とでは何が違ったのだろうか」と自問せずにはいられなかった。

何が対話における創造を準備するのか。この問いに答えることが本稿の目的である。結論を先取りすれば、現時点での私の答えは「参加者が安心することが創造的な対話を準備する」というものである。ただし、「安心」という言葉の意味は自明ではない。着想源の一つは「子どもの哲学」（philosophy for children）で重視される「セーフティ」であるが[2]、本稿にいう安心はこれと完全に重なるものでもない。そこで、第一節において二つのテクストを分析し、安心しているとはどういうことかを示す。

私の安心への関心は単に理論的なものではない。対話を中心とした臨床哲学の活動に参加する中で、私は次第に自分の生き方、世界や他人への態度の取り方を反省するようになった。受験勉強や塾講師のアルバイトを黙々とこなす中で固定されてしまった世界への態度を自覚し、変えるべきだと考えるようになった。それは安心と対比して「安全」とでも名付けられそうな態度である。安全な態度で生きていた私は、さまざまなスケールで予定を立てることによって未来を先取りした。目の前の他人に配慮して予定を変更することはなかった。既定の役目を無難にこなすことを何よりも重視し、自らの関心は黙殺した。未知の領域には踏み込まなかった。そのため、私は、予定が確実に消化されていく全能感を得たものの、既知のことのみが生起するためにひどく退屈でもあった。

対話への参加は、こうした安全な態度を私にゆっくりと自覚させ、態度の変更を促した。安全な態度は、新しい何かが生まれるという対話での経験を妨げる。対話において創造が起こるためには、安全から安心への態度変更が参加者である私に求められる。安全は悪くもないし不正でもないが、人生において多くの創造に出会うことを欲するなら――そして私はそれを欲するのだが――、安全なままではいられない。安心とは、考察の対象である以上に、私のたどり着きたい目的地なのである。それゆえ、本稿は単なる理論的な考察ではなく、私自身の生き方の指針を示すものでもある。

安心についての考察を踏まえて、第二節では対話における安心と創造の関係を問う。さまざまなスタイルと目的をもつ対話があるが、本稿では前述の「さんかふぇ」に絞って検討する。また、対話の公共的性格やコミュニティとの関わりなど、対話を論じる上でも多くの論点がありうるが、先行する多くの対話論を十分に参照して多角的に対話を論じる用意はない。本稿では安心と創造という限られた観点から対話を考察することで、対話の重

要な側面に光を当てようと試みる。

1．安心

今しがた、対話において創造を準備する参加者の態度を安心と名づけた。それでは、安心しているとはどういうことか。これが本節の問いである。しかし、いきなり対話における安心を探ろうとすると、対話のもつ他の諸契機が入り込んでしまうため、安心をうまく取り出すことがかえって難しくなる。そこで、まずは対話以外の創造的な経験を描いた二つのテクストを取り上げ、創造を準備するものを探ってみたい。そこには「安心」という言葉こそ登場しないが、安心と呼ぶにふさわしい態度が見出される。順に検討していこう。

1．1．いるだけでぴかぴか――よしもとばなな「なんくるない」

まず、よしもとばななの小説「なんくるない」を取り上げよう。主人公の「私」は 33 歳の女性イラストレーターである。名の知れた脚本家として社交を好む人物だった夫と離婚してから一年が経過したころ、「私」は「この離婚から来る、ぐるぐるした堂々巡りの考えから抜け出す処方箋」[3] として沖縄への旅行を決心する。そこで訪れた料理店で働く男性にナンパされ、彼と恋に落ちることで次第に回復していくという筋書きである。その料理店を訪れる直前の描写を見てみよう。

> 私は水着に着替えてホテルの前の、仕切られたばかみたいなビーチでちょっとだけ泳いだ。それでもすっかり気持ちはゆるみ、子供のころみたいに水に溶けることができた。
>
> そして、シャワーを浴びて、温泉に行って、ただのポカリスエットをちびちび飲みながら扇風機の前の椅子で涼んで、そのあと部屋でお昼寝をして、また夕方が来て……私は昨日紹介されたお店に向かってぴかぴかになって出かけていった。
>
> そう、海で清められて、お昼寝でゆるめられて、まっさらの私……これまでの経歴も経験もみな忘れてしまった私で、出かけていったのだ。髪の毛なんて乾かしきれず、ちょっと濡れたままで。
>
> 今思うと、その感じがとても大切だったということがわかる。

新しいことが起こるのにいちばん必要なこと、それはそういう感じなのだろう。
だってもうなにが起こってもいいし、なにも起こらなくてもいい。ただ自分がここにいるだけでもう充分にぴかぴかしているのだから[4]。

ビーチで泳ぐ、温泉に行く、昼寝をするなどの行為を通じて「私」の気持ちがゆるんでいく。「新しいことが起こる」ために「大切」だとされる「その感じ」には、リラックスしていることがまず含まれる。離婚以前から「だめ」[5]になっていたそれまでの暮らしから打って変わって、「私」はリラックスしている。この引用からはさらに、リラックスとは単なる心理状態ではなく身体も含めた状態であることも見て取れる。心身は生活において分かちがたく結びついている。身体が強張っているにもかかわらず心はリラックスしているという状態は考えにくい。

より詳しく見ていこう。まず、二度登場する「ぴかぴか」という形容について。二度目には「ただ自分がここにいるだけでもう充分にぴかぴかしている」と言われる。ただ存在しているだけで自らを肯定的に感じられる状態が表現されている。それは言い換えれば、外から見られた私、すなわち社会的な立場や役割をもち、他人からの評価に曝される者としての私という側面を気にせずにいられる状態である。この心境は、「自分が生きていることに対して何の価値も感じられなくなっている」[6]という旅行前のそれとは対照的である。この心境はまた、「子供のころみたいに」あるいは「これまでの経歴も経験もみな忘れてしまった私」として世界を経験できることとしても表現されている。自らが生きるに値するかどうかはもはや問われない。自らを肯定するために、社会の中で存在するに値する何者かであることが必要とされないのである。

次に、「なにが起こってもいいし、なにも起こらなくてもいい」という態度について。ここには二つの相互に関連する契機を見出せる。一つは自らの経験する出来事に対して無防備であることであり、もう一つは未来を先取りしないことである。順に検討しよう。

第一に、「私」はこれから起こる出来事に身を任せている。「私」は予想外の出来事、人生を大きく変えるような出来事をも受け入れる準備ができている（実際、この直後にナンパという予想外の出来事に応じることになる）。未知の何かを受け入れられると言ってもいい。多くの人にとって、日常生活は守らねばならないものや失ってはならないものに満ちているため、自らの利害に従って状況に介入し、ある程度まで支配する必要がある。ところが、離婚によって家庭を失い、一人で旅行しているというやや特殊な状況にある「私」

には、いわば失うものがほとんどない。そのためか、ここでの「私」は、状況を積極的にコントロールする必要を感じておらず、起こるがままに出来事を経験できる状態にある。ただし、一人旅という状況のみがこうした無防備さをもたらすわけではなく、生きているだけで自らを肯定できるという心境もこれを促しているだろう。

第二に、予定が確定されておらず、未来は未知のままになっている。例えばさまざまなスケールで予定を立てて実行するビジネスにおいてはいわば未来の先取りがなされ[7]、予定はそのつどの現在において確実にこなされていく。旅に出る前の「私」もまた、日々をこなすようにして過ごしており、その頃の「意外に思いながらいろいろ感じていくこと」のない「型にはまっ」た暮らしは、示唆的にも「事務的」と形容されていた[8]。ところが、今や「私」にとって未来の計画は重要ではない。未来は未定のままである。あるいはこれを、「私」は今を生きているのだと言い換えられるかもしれない。「私」は現在をそのつど未知のものとして経験する。いつ何が起こるか分からないのだから、「私」は現在から目が離せないはずである。この点はすぐ後に掘り下げよう。

まとめておこう。「新しいことが起こる」ために必要とされる「感じ」には、相互に関連する四つの特徴を見出すことができる。A）心身ともにリラックスしている。B）外面的な評価なしで自己を肯定できる。C）状況を支配する代わりに、出来事が起こるに任せることができる。D）未来を先取りせず、今を生きる。これらが相まって作りだす「ぴかぴか」という感じは、安心していることの重要な側面を言い当てている。

１．２．驚き、夢中になる、一人の人間――六車由実『驚きの介護民俗学』

「なんくるない」の「私」は今を生きているのではないかと述べた。しかし、今を生きるとは具体的にはどういうことだろうか。この点を考えるために、そして安心の別の側面を探るためにも、次に六車由実の『驚きの介護民俗学』を検討しよう。

民俗研究者である六車は、大学を辞めた後、老人ホームで介護職員として働き始める。高齢の利用者を介護する中で、六車は民俗学の手法である「聞き書き」（詳しくメモを取りながら話を聞くこと）がケアの方法になりうることに気づき、民俗学にとって介護現場がもつ意味と民俗学の介護現場への貢献可能性とを探求する「介護民俗学」を提唱するに至る[9]。六車の実践から教わることは多いが、ここで私が注目したいのは介護民俗学そのものよりも、むしろ書名にもある「驚き」である。六車の語る「驚き」は、今を生きるこ

とと、ひいては安心と密接な関係にあると思われるからである。

この著作において驚きは、多様な人生を歩んできた利用者から思いもかけない話を聞く六車の感情を指している。なぜ六車は驚くことができるのかをまず考えてみよう。無論、利用者の話が未知のものであることが主な理由だが、さらに二つの理由が考えられる。

第一に、驚けるだけの余裕があることである。六車は業務の合間にこっそり聞き書きをしていたわけではなく、仕事の一環として施設に認められ、まとまった時間をもらって聞き書きをしていた。ゆえに、その間は他の業務を気にすることなく、聞き書きに専念できた。このように整えられた環境が驚くことを可能にしている。もし片手間で聞き書きをしていたら（それが可能であるとしてだが）、業務に追われて忙しく、集中もできないはずである。いかに意外な話を聞いても驚くことは難しかっただろう[10]。

第二に、「テーマなき聞き書き」という特殊な方法を採ったことである。学術研究としての民俗学においては、聞き書きのテーマを設定し、それについて話してもらうために題材を準備したり、無理のない範囲で会話をテーマの方向に導いたりするそうである[11]。ところが、大学を辞した身である六車は研究という制約に縛られていないため、テーマを設定せずに自由に聞き書きを行うことができた。このことも驚ける状況を形作っている。

> 論文や報告書を執筆することを目的とした以前の民俗学の調査では、テーマに沿った聞き書きをするのが（たとえ遠回りをしたとしても）当然だと思ってきたが、介護の現場ではむしろこちらはあらかじめテーマを持たないことによって、想像を超えた興味深い話を利用者から引き出すことができる。介護現場での「テーマなき聞き書き」は、民俗研究者としても、介護者としても、そして何よりも一人の人間としても、さまざまな経験を踏んで生きてきた利用者の人生そのものに触れることができる至福の時間なのである[12]。

通常の「テーマに沿った聞き書き」では、事前に決められたテーマが語り手と聞き手に制約を与える。聞き書きの中で興味を引く話が出てきても、進んでそちらに逸れることは難しい。ところがテーマなき聞き書きにおいては、話し手の話したいこと、あるいはその場で聞き手の関心を引いたことをめぐって聞き書きを進めることができる。そのようにして引き出された話に驚くという経験が「至福」と呼ばれるほど充実したものになる理由は、それまで知らなかった知識を得たということだけではない。むしろ、話したい、聞きたい

という両者の関心が原動力となって聞き書きが進められること、これこそが至福をもたらしているのではないだろうか。

六車が民俗研究者や介護者としてだけでなく、「一人の人間としても」その至福を感じているという記述も、テーマなき聞き書きの特異性、つまりその場で生じる関心に従って聞き書きがなされるという特徴を示していると思われる。この点は、次の引用で登場する「子ども」の比喩にも通じている。

> 利用者の喪失の語りに涙する私は、まるで昔話を語り聞かされる子どもだ。語られる喪失の体験は、もしかしたら誇張されていたり、あるいは虚構であったりするかもしれない。しかし語り部の圧倒的な存在感を前に、私にはもはやそのことはそれほど問題ではなくなる。私は利用者の語りの樹海（うみ）に飲み込まれていく。体全体を高揚させてその語りの世界に夢中になり、そして熱い涙を流した後には、絶望を生き抜く力に変えていく知恵とエネルギーをもらうことができるのである[13]。

「喪失」は、ここでの語り手である美智子さんの体験を指す。綿打ちの機械に巻き込まれて右手首を失い、さらに夫をも病で失ったことや、幼少期に両親が離婚し、母親が家を出ていったことなどが語られた。そうした喪失の体験は「私［六車］の意図したところではなく、別の話からの展開で語られる」[14]のだが、六車はその語りに「いつも自然と惹きこまれ感情移入し涙を流してしまう」[15]という。「子ども」とは、このように意図せざる語りに惹きこまれ夢中になる様子を表現する言葉である。子どものように語りを聞くとき、自身の役割や立場は後景に退く。この事態について、六車は「介護職員として正しいあり方なのかどうかは自信がない」とも、「民俗研究者としては失格なのかもしれない」とも述べるが、それにもかかわらずこうした「関わり」のうちに「介護職員と利用者との関係」および「民俗研究者と利用者との関係」を「超越」する「可能性」を見出している[16]。外面的な制約を破って聞き書きの場に表出する関心に由来する語り手との関わり、これが一人の人間としての至福を与えるのである。

「一人の人間として」にはさらなる含意がある。六車は、一人の人間として惹きこまれる語りから「絶望を生き抜く力に変えていく知恵とエネルギーをもらうことができる」と述べている。もし純粋に民俗研究者として聞き書きを行ったならば、語りから自身の人生に影響を受けることはなかっただろう。この点に関連して興味深いのは「女の生き方」と

題された節である。35 歳を過ぎた頃、六車は「何も将来の人生設計ができていないという現実に」不安を覚え、「深い霧の中に迷い込んだような気持ち」になる[17]。そこで六車は「研究のためというより、むしろ自分がこれから生きていくためのヒントを得たいというすがりつくような思いで」女性のお年寄りへの聞き書きを始める[18]。委細は省くが、彼女たちの家庭を支える妻や母という典型をはみ出す多様な生き方に驚くことを通じて、六車は「迷いや不安が完全に払拭できたわけではない」にせよ、「誰かの真似ではなく、自分は自分の人生をまっすぐに歩いていってもいいのかもしれない、と思えるようにはなってきた」と述べるに至る[19]。このように自身の生き方への思いを前向きに改めることができたのも、自らの抜き差しならぬ関心に従って（「すがりつくような思いで」）語りを聞いたからであろう。

さて、私が『驚きの介護民俗学』を検討したゆえんの問いに戻ろう。今を生きるとはどういうことか。先述した驚ける理由はこの問いへの部分的な解答でもある。すなわち、聞き書きの間、他の業務を棚上げすることによって聞き書きに専念すること、さらには聞き書きのテーマを設定しないことによってその場でなされつつある未知の語りに集中することである。より一般的に言えば、今を生きるとは、目の前で初めて生まれる未知の出来事に参加し、集中することである。

その場の出来事に集中するとき、すなわち今を生きているとき、どのように状況に臨むことになるのだろうか。例えば勉強嫌いの生徒に対して教師や親が「集中しなさい」と言うとき、その集中は忍耐や我慢といった苦しい経験にすぎないが、それは集中の歪んだ形である。外的な強制なしに生じる場合には、集中とはむしろ夢中になることである。「語りの樹海（うみ）に飲み込まれていく」という受動態の表現は、夢中になることの実態を的確に示している。今を生きるとは夢中になることであり、それは主体的な選択や決断というよりも、他人を含めた周りの状況に巻き込まれることなのである。とはいえ、今を生きる主体は主体性を失っているわけではない。むしろ、自らの関心と響き合うものがそこにあるからこそ、主体は夢中になり、知らぬ間に状況へと巻き込まれていくのである。

1．3．小括

ここまで「安心」という言葉は登場しなかった。それにもかかわらず、以上の検討を通じて見出されたものは、私が対話への参加を通じて目指すに至った安心という態度そのも

のである。よしもとが「新しいことが起こる」と表現し、六車が驚いた経験は、創造にほかならない。そして、創造を語ると同時に、彼女たちは創造を準備する態度をも描き出していた。それこそが安心である。

順にまとめておこう。「なんくるない」の「私」は、A）心身ともにリラックスしている。B）外面的な評価なしで自己を肯定できる。C）状況を支配する代わりに、出来事が起こるに任せる。D）未来を先取りしない。

さらに、六車の「驚き」や「夢中」、そして「一人の人間」も、それぞれ安心の特徴を示している。すなわち、E）未知の出来事をそのままに経験して驚くこと、F）現在の状況に夢中になり集中すること、G）自らの関心を素直に表現し、関心に従って行為すること。私の考えでは、これらはすべて安心していることの重要な契機である。

２．安心が準備する創造的な対話

前節では対話以外の場面を検討し、安心を特徴づけた。本節では、とよなか国際交流協会で開かれており、私自身も参加している対話の場である「さんかふぇ」に即して、対話における安心と創造の関係を考えてみたい。まず、さんかふぇで心がけていることと安心との関係を検討する（１）。次に、さんかふぇにおいて創造がどのように起こるかを考察する（２）。

２．１．安心できる場づくり――さんかふぇ

公益財団法人とよなか国際交流協会は、「外国人が安心して集える居場所づくり＆エンパワーメントをすすめる事業や多文化共生社会を推進するひとづくりを中心に、さまざまな活動を地域や学校と連携しながら日常的に展開して」[20]いる。さんかふぇは「事業」ではなく「プロジェクト」という特殊な位置づけだが[21]、外国人とその支援者たちが「安心して集える居場所づくり」を目指す点では多くの事業と共通している。それでは、どのようにすれば安心できる場を作ることができるのだろうか。さんかふぇの様子を振り返りつつ、五つの観点からこの問いに取り組もう。

まず、基本的ではあるが重要なことは、参加者の身体に気を配ることである。とよなか国際交流センターは屋内にあるので雨風の心配はないが、照明や空調には調節の余地があ

る。お互いの声が無理なく聞こえるように椅子やソファを配置する必要もある。より基本的なこととしては、参加者の自身の体調への配慮が挙げられる。さんかふぇへの参加は強制されないので、病気や怪我を押して無理に参加する必要はない。また、長時間にわたって話し合い続けるのではなく、途中で休憩を挟み、参加者の持ち寄る飲み物やお菓子によってリラックスすることも安心を促す。特定の場所と時において身体をもった人間が話したり聞いたりするのだという、このあまりにも自明な事実を見落とすと、以上のような配慮を欠きかねない。

第二に時間について。さんかふぇは基本的に二時間で終わるが、これは未来の先取りや「事務的」な予定の消化とは異なる。さんかふぇでは何を話すかが予め決まっていない。おおまかな話題を予め考えることはあっても、必ずしもそれを口にするわけではない。そのため、実際に始まるまで、そして始まってからも、これから何が起こるかは分からないのである。さんかふぇの時間設定は、六車の聞き書きの場合と同様、その間は他のことを気にしないでいいようにするためのものである。「なんくるない」のような旅行の場合とは異なり、日常生活の中で何が起こるか分からない場をもつためには、かえって時間の区切りが必要なのである。

第三に座り方とコミュニティボール[22]について。さんかふぇでは参加者が円になり、その円の中に何もないようにすることが多い。また、コミュニティボールを使う場合には、ボールをもった人が話し、他の人はそれを聴くというルールを初めに告げる。これらが可能にするのは、誰かの話す姿がどの参加者にも見えるということである。これは一見すると些事にすぎないが、例えば手元の資料を見ながら話を聞く会議や、全員の姿を見ることができない教室での授業のようなコミュニケーションのあり方と比べると、その小さからぬ意義が明らかになる。誰かが話すのを見るとき、その姿勢や表情が見える。その話が当人にとってどのような重みをもち、どのように感じられているか、さらにはどのようにその場の参加者に向かって話しているかといったことが不可分に結びついたまま伝わってくる。円になってコミュニティボールを用いることは、要点を簡潔に述べることが理想視される報告や連絡とは異質なコミュニケーションを促す。話の内容のみならず、まさにその人が今ここで話しているということそのものが受けとめられる場が目指されるのである。周りの参加者がそのように聴いていることは、その場で話すということを話の内容にかかわらず認めることでもある。そのような場は話す者に安心をもたらすだろう。

第四に自己紹介について。さんかふぇでは毎回、全員が冒頭に長めの自己紹介を行う。「呼

んでほしい名前」と「今日参加したきっかけ」に加えて、その日だけの質問に答えてもらう。三つ目（四つ目があることもある）の質問は予め考えておく場合とその場で募る場合があるが、いずれも「今年の大事件」や「最近食べたおいしいもの」など、全員が答えられるものであるように気をつける。こうした質問への回答によってなされる自己紹介は、所属や立場の明示を目的とするものではない。むしろ、参加者自身の関心や気持ちが見えるようになる質問が出されることが多い。こうした質問は、ふだんの肩書などに囚われないで、一人の人間として対話に参加することを促すだろう。

最後にテーマがないことについて。多くの場合、さんかふぇでは予めテーマが設定されていない。そのため、何を話題にするか、どの発言がどのように引き受けられ展開されるかはまさに参加者次第である。ある参加者の発言に対して他の参加者が関心や疑問を抱き、それを表現することによって、対話の流れが緩やかに形成される。誰かの自己紹介の中で気になったことについて他の参加者が質問し、返答がなされるうちに、いつの間にかその日の話題が生まれていることも多い（最後まで一つの話題に定まらないこともある）。このことはさんかふぇを先の読めない対話の場にするとともに、他方で参加者に一つ一つの発言に耳を傾けるよう促す。対話を方向づける役割を担う参加者のいないさんかふぇでは、対話の行く先は参加者全員の協働によって決まるともなく決まっていく。それゆえ、どの発言も聞き逃せない。テーマがないことは、各自の関心がそこで表現されるよう誘うと同時に、全員が対話に集中するよう促すのである。

ただし、テーマがないこと、あるいは何をテーマにしてもいいことは、何でも自由に話していいということではない。誰かの発言やそれへの反応によって別の誰かが傷つくことのないように、相互の配慮が必要になる。国際交流センターで開かれるさんかふぇには多様なルーツをもつ人が参加するため、発言が誰かを脅かす可能性に対して普通以上に敏感である必要がある。一年目のさんかふぇを振り返った際にもこのことが話題になった。協会職員の阿部和基さんは、さんかふぇで「誰でも自由に発言できる」ことを履き違えると、「その人〔話題の当事者である参加者。例えば「女らしさ」について話している場合の女性〕がいないものだと思って発言しちゃう」ために、「その場にいる人を傷つけてしまう」ことがありうるという「危うさ」を感じたと語る[23]。誰かがコミュニティボールをもって話すのを聞くことは、どんな人がその場にいるかを見ることでもあるのかもしれない。安心は環境を整えるだけで完備される類のものではない。各参加者のその場での一つ一つの振る舞いもまた、全員の安心にそのつど大きく影響する。

２．２．安心して話すことと創造

身体に気を配ること、未定の時間を確保すること、円になってコミュニティボールを使うこと、自己紹介をすること、そしてテーマを予め決めないこと。これらの工夫によって、さんかふぇは参加者が安心できる場になることを目指している（これらがなされうる工夫のすべてだと主張するつもりはないが）。では、安心していることは創造とどのように関わるのだろうか。最後にこれを考察しよう。

ただしその前に、さんかふぇで起こる創造の具体的なあり方について述べておきたい。冒頭で少し述べたように、私は創造を最大限広い意味で、しかも能動的な行為というよりも受動的あるいは中動的な出来事として捉えている。つまり、創造とはある人にとって今までになかったことが起こることである。この意味での創造は、さんかふぇでは例えば次のような仕方で生じる。ある話題について対話以前とは異なる視点で考えることで何かに新しく気づくこと。普段の会話よりも踏み込んで話すことで他の参加者や自分自身の意外な一面に出会うこと。初対面の人と話すことで新たな人間関係が生まれること。話しながら振り返ったことをきっかけに、過去の出来事について今までと異なる考え方ができるようになること。現在抱えている悩みについて何らかの答えが出ること、などなど。さんかふぇの参加者の間ではこうした創造を「発見」と呼んでおり、発見があったかどうかはさんかふぇを振り返る際に重視される点の一つである[24]。

それでは、どのように話し、聞くことができると発見が生まれる（創造が起こる）のだろうか。まず注目したいのは、最初期からのさんかふぇの参加者であり運営メンバーでもある金和永が前出の振り返りの際に語った「いつの間にかしゃべっている」という事態である。

> さんかふぇはいつの間にかしゃべっていて。自分、何を言っているんだろうなと思いながらしゃべっていることもよくあるので。別にそれでもいい、皆が聞いてくれているっていうのがありがたいし。[…] 自分の結構悩んでいることとか、ひっかかっていることとか、そういうものの周りから勝手にしゃべっているというのは、友達との会話でもほとんどないし、そういうことをいつの間にかしゃべらされているという経験が、僕がさんかふぇに来たいとずっと思っている理由なのかな[25]。

単に「いつの間にかしゃべっている」だけであれば普段の「友達との会話」と差はないはずだが、ここで金は明らかにさんかふぇでの対話と日常の会話を区別している。二つの相違点が挙げられよう。一つはさんかふぇでは「皆が聞いてくれている」こと、もう一つはさんかふぇで話す内容が「自分の結構悩んでいること」や「ひっかかっていること」になりうることである。さんかふぇの特徴をなすこれら二点は、ともに安心と創造に関係すると考えられる。

他の参加者が聞いてくれていることという第一の点は、さんかふぇをめぐる金の最初の考察を思い起こさせる。そこで金は、参加者が「十分に対話に参加できている」[26] ために必要なものを探る中で、次のように述べていた。

> それでも対話の場で私が自分自身の経験から語り出し、私の思考を提示することが出来るのは、対話の場が私を促してくれているからに他ならない。少なくとも、私がその対話の場で対話の参加者として認められ、その意見の正当性や真偽とは無関係に、曝されることになるだろう私が認められていること。それを対話者が感じられることが必要ではないか。これを対話の場における「安心」と呼んでもよいかもしれない[27]。

対話に参加する私がその発言の内容如何に関わらず認められること、これを金は「安心」と呼ぶ。先の「皆が聞いてくれている」とは、この安心を別様に表現したものだと考えられる。

さらに興味深いことに、金は安心して対話に参加することを「対話にのめり込んでいる」[28] こととしても論じている。対話にのめり込むとは、対話に対して予め抱いていた「自分の期待や不安を忘れ」て「予測不可能な対話」に参加することだとされる[29]。前節で安心の特徴として述べたこと、つまり自らの意図で状況を方向づけることを放棄し、未知の出来事に無防備に参加し夢中になることが、ここではのめり込むことと呼ばれているのである。

そして、このように安心して対話にのめり込んでいることこそ、あの「いつの間にかしゃべっている」ことを促すものだと言えるだろう。それでは、このことと創造ないし発見とはどのように関係するのだろうか。この点に関して、メルロ＝ポンティが重要な示唆を与えてくれる。『知覚の現象学』における対話の記述を見てみよう。

> 現在の対話においては、私は自分自身から解放されている。他人の考えは確かに彼の

考えであり、それを形成するのは私ではないのだが、私はそれが生まれるやいなやそれを捉え、むしろそれに先駆けてさえいるのだし、同様に、相手の唱える異議が私から、自分が抱いていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもするのであり、こうして、もし私が他人にさまざまな考えを考えさせるのだとすれば、他人もまた私に考えさせているわけである[30]。

ここにいう自分自身からの解放とは、まずは「私たちのどちらが創始者だというわけでもない共同作業」[31]である対話への参加を指すが、そこにはさらなる含みがある。この引用に続く一文によれば、私が対話から身を退いたときにのみ、「他人は再びその不在に立ち戻ったり、あるいは私に現前しつつ私にとって脅威のように感じられたりする」[32]。裏返して言えば、対話の最中には他人はその場に現前しており、しかも私を脅かさない仕方で居合わせていることになる。これは、金が対話にのめり込むこととして捉えたものとまったく同じ事態を指している。メルロ＝ポンティの語る自己自身からの解放とは、金と私が安心と呼ぶものにほかならない。

さらに重要なのは、この短い対話論が非反省的な水準での対人関係の例として書かれていることである。つまり、メルロ＝ポンティの鋭い洞察によれば、「自分が抱いていることさえ知らなかったような考え」が生まれる対話とは、自らの経験に反省が及ぶ以前の経験なのである。対話に参加する主体が反省以前の経験において自己自身から解放され、話すことを通じて世界へと自らを表現するとき、それまで未知に留まっていた新しい何かが引き出される。参加者がそれを経験する対話は、まさしく創造的な対話である。

参加者が自身に退引して反省することなく行う創造的な対話とは、まさに参加者が「いつの間にかしゃべっている」対話ではないだろうか。そして、ここまでで確認してきたように、いつの間にかしゃべることを促すのは、お互いを脅かすことなく一つの対話にのめり込んで言葉を引き出し合うこと、すなわち安心していることであった。つまり、参加者が安心しているとき、対話は創造的になるのである。これが本稿の結論である。

さて、金の語るように、さんかふぇは時に安心して話せる場になる。とはいえ、さんかふぇがいつも安心できる場たりうる保証はどこにもない。しかし、何かが生まれた！　と私が驚いた数回のさんかふぇを振り返れば、そのとき私を含む参加者たちは確かに安心していたと思われる。安心が必ず創造を導くとは言えないにしても、少なくとも安心は創造を促す。さんかふぇはこれからも続く。何かが新しく発見される場になることを目指して、

参加者と協働しながら、さんかふぇを安心できる場にしていきたい。

おわりに

対話について多くが論じられないままになっている。本稿で考察した創造についてさえ、なお語るべきことは多い。創造は具体的にはどのように起こるのか。金の書くように、悩みやひっかかりといったふだんは話しにくいことが話題に上ることによってか。メルロ＝ポンティが述べるように、他人が私に異議を唱えることによってか。さらに立ち入って考察するためには対話の録画とその分析が必要になるかもしれない。

対話について他にも考えるべきことがある。対話という場づくりが、例えばとよなか国際交流協会に集う人たちのコミュニティにとってもつ意味[33]。そしてそうした場づくりが不可避的にもつ政治性。さらに、異質なものとの出会いと創造との関係。エンパワーメントあるいは治癒としての対話の可能性。これらについての考察は今後の課題としたい。

安心についても同様である。今回はいくつかの特徴を列挙するに留まり、それら相互の関係を明確にできなかった。また、創造的な経験のために安心が求められるとしても、それではすべての人がたえず安心せよと主張すべきなのだろうか。私が抜け出そうとした安全な態度は全面的に否定されるべきなのだろうか。こうしたことについても結論を急がず、これからの人生の中で考えていくことにしたい。

参考文献

- 阿部和基・今井貴代子・岩崎宏・川崎唯史・金和永・ネルソン百合子・平松マリア（2012）,「「さんかふぇ」のこれまでとこれから」,『臨床哲学のメチエ』第 18 号 , pp. 2-14.
- 川崎唯史（2011）,「プロジェクトの報告」,『臨床哲学のメチエ』第 17 号 , pp. 3-4.
- 金和永（2011）,「もどかしい対話―「さんかふぇ」という試みから」,『臨床哲学のメチエ』第 17 号 , pp. 5-8.
- 楠本瑶子（2011）,「コミュニティボールとは？」,『臨床哲学のメチエ』第 17 号 , p. 17.
- 本間直樹（2012）,「哲学者の実践としての〈探究のコミュニティ〉」,『臨床哲学』第 14 号 -1, pp. 16-31.
- Merleau-Ponty, M.(1945), *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, coll. «tel», 2005.

・ 六車由美（2012）,『驚きの介護民俗学』, 医学書院 .
・ よしもとばなな（2007）,『なんくるない』, 新潮文庫 .
・ 鷲田清一（2006）,『「待つ」ということ』, 角川選書 .

注

1 さんかふぇの開催に至るまでの経緯と 2011 年度の実施状況については川崎 2011 を参照。

2 セーフティに関しては、長きにわたって子どもの哲学を実践している本間直樹の論文を参照（本間 2012, pp. 18-21）。

3 よしもと 2007, p. 119.

4 同上 , pp. 142-3.

5 同上 , p. 94.

6 同上 , p. 105.

7 鷲田清一によれば、このような未来の先取りは現代社会全体に浸透している（鷲田 2006）。

8 よしもと前掲書 , p. 126.

9 六車 2012, p. 6.

10 驚けなくなった頃を六車が回顧する箇所にもこのことの傍証が見出される。職場の配置転換の都合で、職員の不足している現場で働くこととなった六車は、非常に多くの業務を「滞りなくこなす」ために、自覚的に「驚かない」ように努めたという（同上 , p. 209）。なすべき業務が予め決まっており、それをこなすという態度においては、今を生きることができなくなってしまう。それゆえ驚くことができないのである。

11 cf. 同上 , p. 10.

12 同上 , p. 19.

13 同上 , pp. 188-9.

14 同上 , p. 185.

15 同上 , p. 186.

16 同上 , p. 189.

17 同上 , p. 40.

18 同上 , p. 41.

19 同上 , p. 53.

20　公益財団法人とよなか国際交流協会 HP,「どんなことをしているの？（事業紹介）」http://www.a-atoms.info/whatdoing/, 2013/3/25 アクセス .

21　2011 年 4 月から 5 年間、とよなか国際交流センターの指定管理者となったとよなか国際交流協会は、「みんなでデザインする『協会（組織）、活動（人びと）センター（公共空間）の 5 年』」、略して「デザイン 5（ファイブ）」を進めている。さんかふぇはデザイン 5 のプロジェクトの一つであり、「協会にかかわる様ざまな人びとが参加し話し合うオープンな場」であり、「“対話” から生まれるものを大切に」すると特徴づけられている。（同上 ,「デザイン 5」http://www.a-atoms.info/design/, 2013/3/25 アクセス .）

22　ハワイや日本における「子どもの哲学」などの対話の際に使われる毛糸のボール。『臨床哲学のメチエ』第 17 号に紹介がある（楠本 2011）。さんかふぇでは各年度の初回にボールを作成し、その後も同じボールを使っている。

23　阿部ほか 2012, pp. 5-6.

24　2012 年度から、参加者の許可を得てさんかふぇの感想を話す様子の撮影を始めた。その際に各参加者が「新たに発見したこと」を尋ねてきた。蓄積された映像の分析に着手したものの、本稿には反映できなかった。

25　阿部ほか 2012, pp. 8-9.

26　金 2011, p. 7.

27　同上 .

28　同上 , p. 6.

29　同上 , p. 7.

30　Merleau-Ponty 1945, p. 412.

31　ibid.

32　ibid.

33　企画段階からさんかふぇに参加している本間直樹は、対話を含む哲学者の実践が「探求のコミュニティ」を創造すると述べるが（本間 2012）、この実践の具体的なあり方には、既存のコミュニティに哲学者が出かけていって協働することも含まれるだろう。